

# 基調報告

報告者

福岡大会研究部長 陶山 嘉一

(春日市立天神山小学校教諭)

# 基 調 報 告

福岡大会研究部長  
春日市立天神山小学校教諭 陶山 嘉一

## 第49回全国学校体育研究大会 福岡大会基調報告

報告者 福岡県春日市立天神山小学校  
教諭 陶山 嘉一

はじめに、中学校第2学年の陸上運動ハードル走における、単元導入時の生徒の姿をご覧ください。踏みきり、ぬき足の膝の折りたたみ、インターバルの様子に気を付けてご覧ください。

中学校 第2学年 陸上運動「ハードル走」での単元導入時の子どもの姿



単元導入時の映像

単元導入時でのハードル走の様子はいかがだったでしょうか。引き続き、勢いよくハードルを走り越えていくことをねらいとして学習を展開した、単元終末時での生徒の姿ご覧ください。

中学校 第2学年 陸上運動「ハードル走」での単元終末時の子どもの姿



単元終末時の映像

踏みきり、ぬき足の膝の折りたたみ、インターバルの様子はいかがだったでしょうか。このような技能の向上が見られたこの生徒は、単元の終了後に、次のような感想を書いていた。

### 子どもの感想

最初は、踏み切り足もあわずハードルを低く跳び越したりすることもできませんでした。でも最初に先生が撮ってくれた自分のビデオとモデルのビデオを比較する中で**インターバルで得たスピードを生かす踏み切りのポイントなどがわかりました。そのポイントを友達や先生にアドバイスしてもらったおかげで、第2ハードルまでにしぼった時間を繰り返す中で膝の曲げ方もよくなり、2台目までも勢いよく跳び越せるようになりました。**最後のタイムトライアルでは、5台のハードルを跳び越さなくてはいけませんでした。2台目までの膝の曲げ方を意識すると、リズムよく走ることができ、とても気持ちよかったです。タイムも縮まり、最後のビデオを見ると、自分の伸びがすごく実感でき、「やればできる!」という自信がわいてきました。

**楽しかった理由の分析**

- できる喜び
- わかる喜び
- かかわる喜び
- 活用する喜び

運動の楽しさ

自分のビデオとモデルのビデオを比較する中で、「インターバルで得たスピードを活かす踏み切りのポイント等がわかりました。そのポイントを友達や先生にアドバイスしてもらったおかげで、第2ハードルまでに絞った練習を繰り返す中で膝の曲げ方も良くなり、2台目まで勢いよく跳び越せるようになりました。最後のタイムトライアルでは、5台のハードルを跳び越さなくてはいけませんでした。2台目までの膝の曲げ方を意識すると、5台目までリズムよく走ることができ、とても気持ちよかったです。」と、この生徒は技能が向上する過程で「できる喜び・わかる喜び・かかわる喜び・活用する喜び」を味わいながら体育学習を行っていたのです。

### 目指す子どもの姿



福岡大会では、この生徒のように運動の楽しさを味わいながら、ねらいとする技能、態度、知識、思考・判断を着実に身につけていく姿を、幼稚園期から小学校期、中学校期、高等学校期において目指し、

### 福岡大会研究主題

運動の楽しさを味わわせ  
体育的学力の確かな定着を図る  
体育授業の創造

～ 幼児児童生徒の発達の段階を踏まえて ～

研究主題を、運動の楽しさを味わわせ、体育的学力の確かな定着を図る体育授業の創造、副主題を、幼児児童生徒の発達の段階を踏まえてと設定し、三ヶ年間、研究に取り組んで参りました。

### 主題・副主題設定の理由

#### 体育科・保健体育科の改訂の要点から

- ・各領域において身に付けさせたい具体的な内容を明確に示す
- ・生涯にわたって少なくとも一つの運動やスポーツを継続する

体育的学力の保障

運動やスポーツの楽しさの実感

#### 本県の児童生徒の体力・運動能力の実態から

- ・高い体力水準を維持するためには運動、スポーツを週3回以上、しかも2時間以上行うことが重要な役割を果たしている

校種間の接続

指導内容の系統性

まず始めに、この大会の主題、副主題を設定した理由について説明いたします。

学習指導要領、体育・保健体育科の改訂の要点で示されていますように、これからの体育授業の目指す方向として、ねらいとする技能、態度、知識、思考・判断の指導内容を着実に身につけるといふ体育的学力の保障は、絶対に必要なものだと考えています。

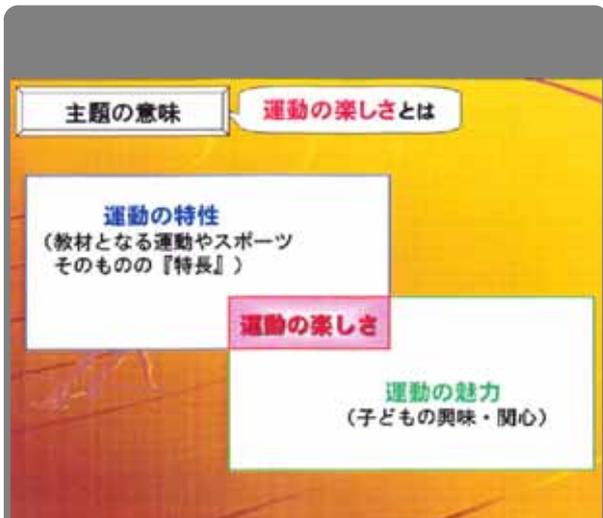
それに加え、生涯にわたって、少なくとも一つの運動やスポーツを継続することができるような子どもを育てていくためには、運動やスポーツの楽しさを十分に味わわせることも欠かせないことであると考えております。

このような考えから、福岡大会では、研究主題を「運動の楽しさを味わわせ、体育的学力の確かな定着を図る体育授業の創造」と設定しました。

研究をスタートしました平成20年度の、本県の児童生徒の新体力テストの調査結果は、全国平均を上回っているか、あるいは有意差無しの高割合が高い項目は、8項目中わずかに20メートルシャトルランだけでした。

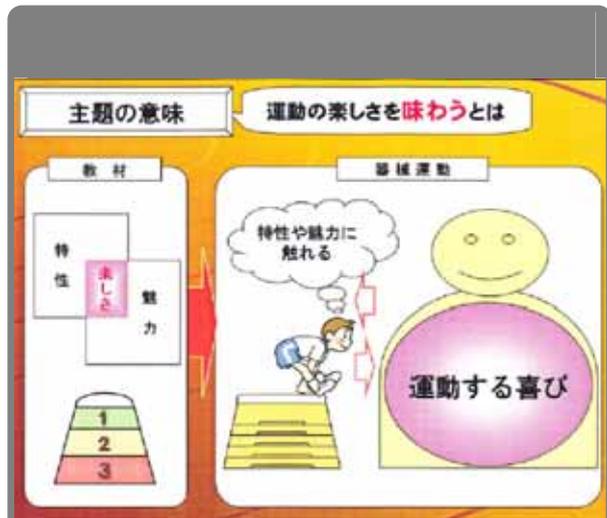
20メートルシャトルラン以外の項目を年齢別に見てみると、加齢とともにその結果は緩やかな向上は見られましたが、全国平均をやや下回る傾向にありました。この要因を特定することはたいへん難しい問題ですが、新体力テストの合計点と、運動・スポーツの実施状況・実施時間との関係を見る限り、スクリーンに示していますように、日常生活の中で運動・スポーツを週3回以上行うこと、しかも、その運動・スポーツを実施する時間が2時間以上であることは、高い体力水準を維持するために重要な役割を果たしているようでした。

そこで、本県の児童生徒の体力・運動能力の実態から、特に児童生徒の運動の習慣化を図ることが重要であると考えました。そのため、小学校、中学校及び高等学校の12年間の態度や知識の積み上げはもちろん、その基盤となる幼稚園を含めた各校種間の接続や、指導内容の系統性を十分踏まえた指導を積み上げていくことが大切であり、その積み上げを図ることで、主題で目指す子どもに迫っていくことができると考え、本副主題、「幼児児童生徒の発達の段階を踏まえて」を設定いたしました。



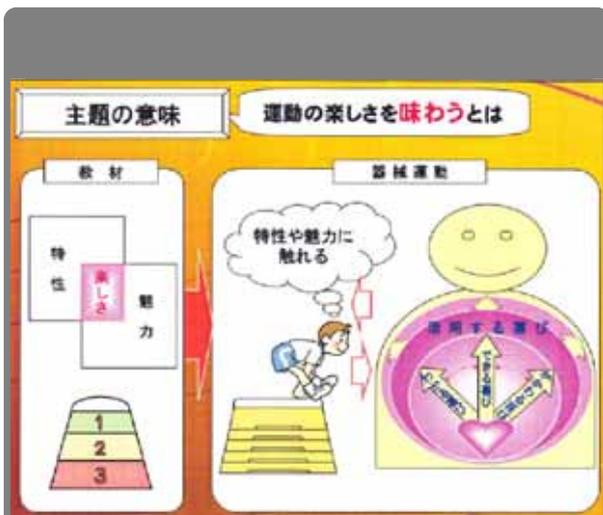
それでは、主題の意味について説明いたします。

まず、主題に掲げています運動の楽しさは、運動の特性と運動の魅力の両面からとらえたものであると考えています。



このような運動の楽しさは、運動やスポーツの教材自体がもつものであって、子ども自身が運動的な遊びや、運動・スポーツを直接経験することを通して初めて実感できるものであると考えています。

このように、運動の楽しさを子どもが実感した時に内面に抱く快い感情を運動する喜びととらえ、



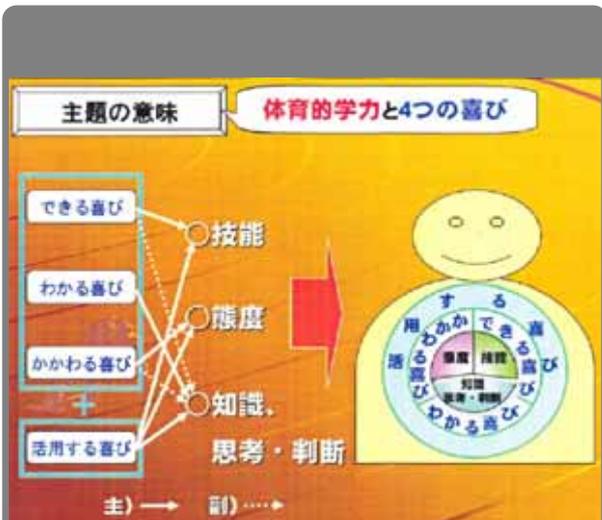
このような構造で、運動の楽しさを味わう姿を考えています。

子どもが、運動やスポーツを直接経験することを通して抱く運動する喜びには、できる・わかる・かかわる、それぞれの喜びと、それらを基盤とした活用する喜びの四つの喜びがあると考えています。



できる喜びとは、運動的な遊びや、運動・スポーツを経験する中で抱く「初めてできた！もっとできるようになりたい」等の感情のことです。わかる喜びとは、運動的な遊びや運動・スポーツを経験する中で抱く「この場面では、こうすればいいんだ」等の感情のことです。かかわる喜びとは、運動的な遊びや、運動・スポーツを経験する中で抱く「みんなと仲よく運動するって楽しい。」等の感情のことです。これらの三つの喜びを基盤にした活用する喜びとは、新たな運動的な遊びや、運動・スポーツと出会う中で抱く、「新しい技にも前時のまわり方で調子よくできた」等の感情のことです。

このような四つの喜びを通して子どもが身に付ける体育的学力と、喜びの関係について説明いたします。



体育的学力とは、幼稚園教育要領や、小・中・高等学校学習指導要領の体育・保健体育編、特別支援学校学習指導要領に示す、運動的な遊び、運動・スポーツに関する技能や態度・知識、思考・判断の内容が幼児・児童・生徒に身に付いた能力のことであり、本研究では、運動の楽しさを味わう中で、自分の力として身につけていくことであるととらえています。



確かな定着を図る体育授業の創造とは、できる・わかる・かかわる喜びと、活用する喜びを繰り返し味わわせながら、身に付けるべき技能や態度、知識、思考・判断を習得させ、幼稚園期・小学校期・中学校期・高等学校期と積み上げ、子ども自らが運動やスポーツを生活の一部として生涯にわたって継続していくことができるような体育授業を、意図的・計画的・組織的に構築していくことである、と考えています。



そこで目指す子ども像を、運動的な遊びや運動・スポーツの楽しさに触れる中で、できる喜び・わかる喜び・かかわる喜びを味わい、体育的学力を身に付ける子ども。

三つの喜びとともに、新たな運動的な遊びや運動・スポーツ挑戦しながら身に付けた体育的学力を活用する喜びを味わい、体育的学力をより確かなものにしていく子ども、と設定しました。

**副主題の意味** **幼児児童生徒の発達段階を踏まえてとは**

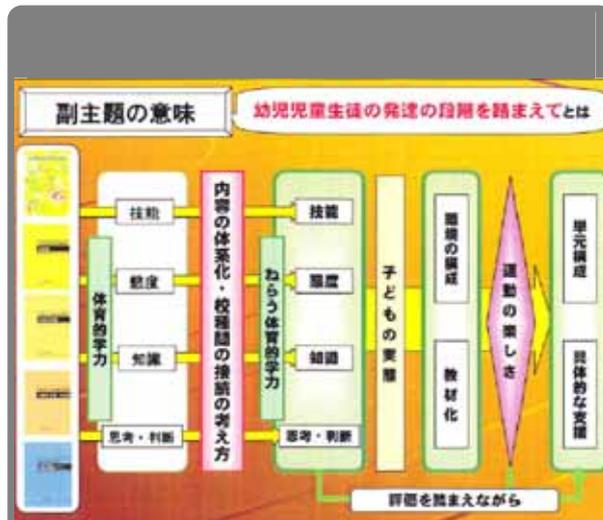
小学校		中学校		高等学校	
1, 2年	3, 4年	1, 2年	3, 4年	1, 2年	3, 4年
種々な動きを身に付ける時期		多くの運動を体験する時期		少なくとも一つのスポーツに親しむ時期	
体づくり運動	体づくり運動	体づくり運動	体づくり運動	体づくり運動	体づくり運動
空手・柔道	空手・柔道	空手・柔道	空手・柔道	空手・柔道	空手・柔道
剣道	剣道	剣道	剣道	剣道	剣道
水泳	水泳	水泳	水泳	水泳	水泳
球技	球技	球技	球技	球技	球技
ダンス	ダンス	ダンス	ダンス	ダンス	ダンス
ゲーム	ゲーム	ゲーム	ゲーム	ゲーム	ゲーム
武道	武道	武道	武道	武道	武道
体育理論	体育理論	体育理論	体育理論	体育理論	体育理論

副主題の意味について説明していきます。

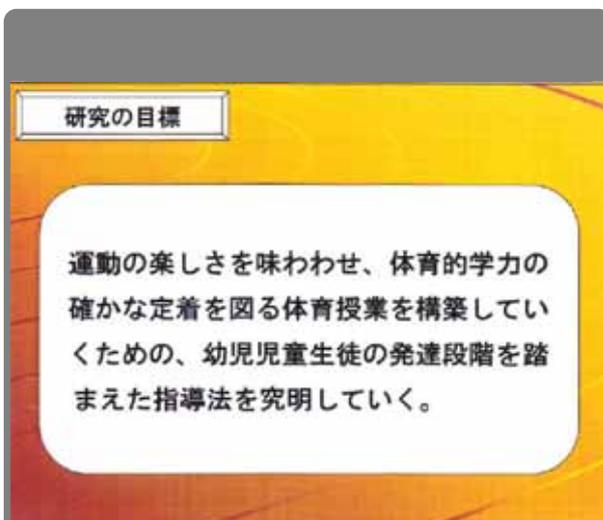
体育的学力の確かな定着を図る授業を組み立てていくには、指導しようとする当該学年のその期に取り扱う単元の指導内容だけの理解では、充分ではないと考えています。具体的には小学校入学時から高等学校卒業時までの12年間を見通した指導内容の体系的なとらえ方が不可欠であると考えています。特に、本研究では幼稚園を含めた幼・小・中・高を踏まえた校種間の接続を考えていく必要があるため、



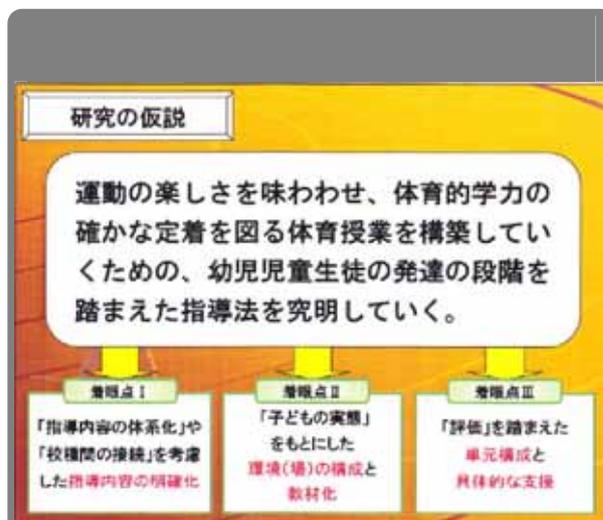
このような考え方を、幼稚園期から高等学校期の内容を見通す指針として授業づくりを進めていくことにしました。



この考え方を踏まえながら、当該学年のその期に取り扱う単元でねらう体育的学力を明らかにし、子どもの実態を分析しながら、教材化、単元構成、具体的な支援の流れで授業づくりを図っていくことを、副主題「幼児児童生徒の発達の段階を踏まえて」ととらえています。



そこで、研究の目標を、運動の楽しさを味わわせ、体育的学力の確かな定着を図る体育授業を構築していくための、幼児児童生徒の発達の段階を踏まえた指導法を究明していくとしました。

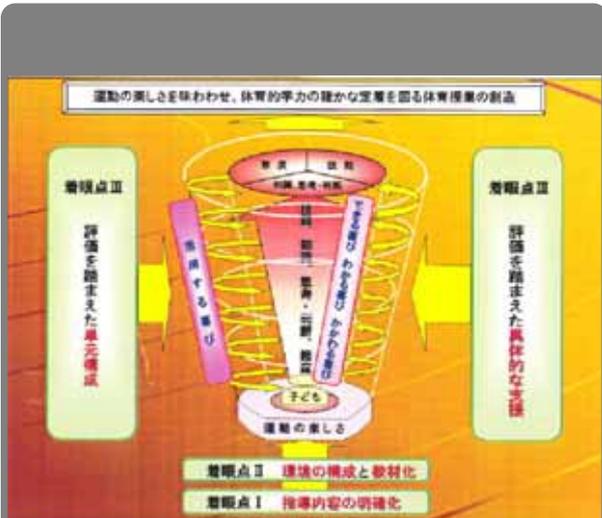


この目標に迫るために次の三点に着眼し、研究を進めることにしました。

まず一点目は、指導内容の体系化や校種間の接続を考慮した指導内容の明確化です。

二点目は、幼稚園から高等学校までの子どもの実態をもとにした環境の構成と教材化です。

三点目は、評価を踏まえた単元構成と具体的な支援です。



この三点に着眼して体育授業を積み上げていけば、大会主題、運動の楽しさを味わわせ、体育的学力の確かな定着を図る体育授業を具現化できるであろうと考えました。

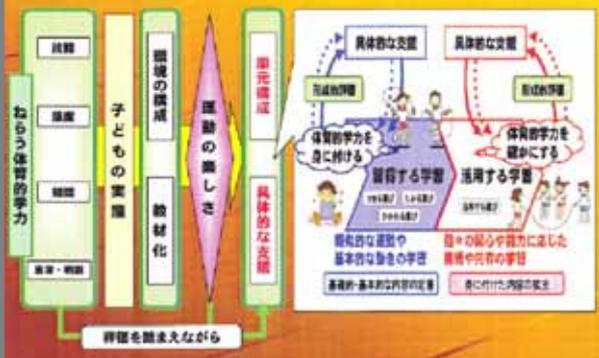


それでは、着眼点 から具体的に説明いたします。  
 指導内容を明確にするとは、単に当該学年のその期に取り扱う単元でねらう体育的学力だけを明らかにすることではなく、先ほど申しました幼稚園から高等学校までを見通した指導内容の体系化、校種間の接続の考え方を踏まえ、ねらう体育的学力をより明らかにしていくことです。  
 例えば、陸上運動系の技能においても、内容の高まりを分析することは不可欠です。



次に、着眼点 について説明いたします。  
 子どもの実態をもとにした環境の構成と教材化とは、明確にしたねらいとする体育的学力をフィルターとして、目の前にいる子どもの今の実態を明らかにし、実態に即しながらよりよく体育的学力が身に付きやすいように、幼稚園であれば環境の構成を、小学校・中学校・高等学校であれば教材化を図っていくことです。

着眼点Ⅲ 単元構成と具体的な支援



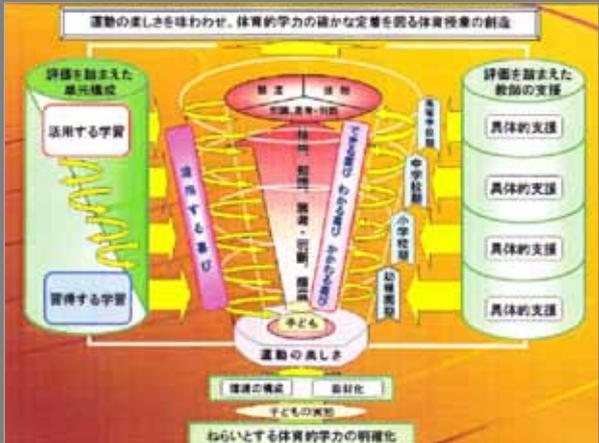
最後に着眼点 について説明いたします。  
 着眼点 のようにしてどんなに環境や教材を工夫しても、教師から一方的にやらされる学習に終始してしまったり、子どもたちの主体的な追究活動が見られない単元になってしまったりしては困ります。

また、一方、子どもたちが精一杯活動し、十分に運動の楽しさに触れているようであっても、身に付けなければならない技能や態度、知識、思考・判断を習得しないまま終わってしまう単元であっても困ります。

そのためには、運動の楽しさに充分に触れさせることと、体育的学力の確かな定着が図れることのいずれをも踏まえた単元構成と支援の仕組みを工夫していく必要があると考えました。

そこで、まず子ども自らが体育的学力を身に付けていくための内的なエネルギーである、できる・わかる・かかわる喜びを味わう時間を充分保証した上で、活用する喜びへと広げていくステージ的な単元の流れを組み立てることにしました。

そして、その単元の組み立てに応じて、運動の楽しさはもちろん、ねらう体育的学力の確かな定着に繋がるように支援し、ねらいとその到達の程度を形成的に評価しながらの具体的な支援を繰り返し位置づけることにしました。



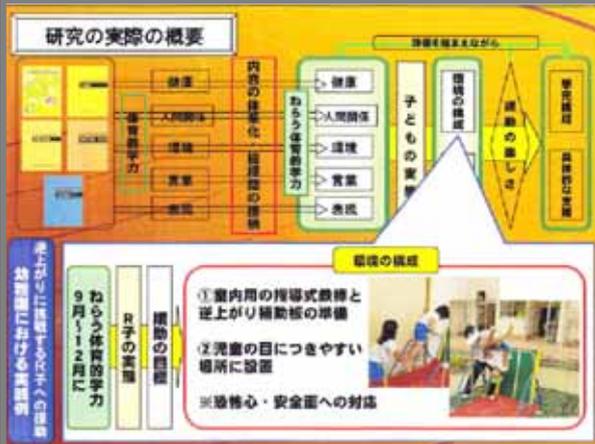
この様に、ねらいとする体育的学力を明らかにし、子どもの実態に応じた環境や教材を工夫し、評価を踏まえた単元構成と具体的な支援を位置づけていくことで主題が達成できると考え、実践研究に取り組んで参りました。



それでは、幼稚園、そして、各学校種での実践の概要について、三つの着眼点を中心に報告いたします。

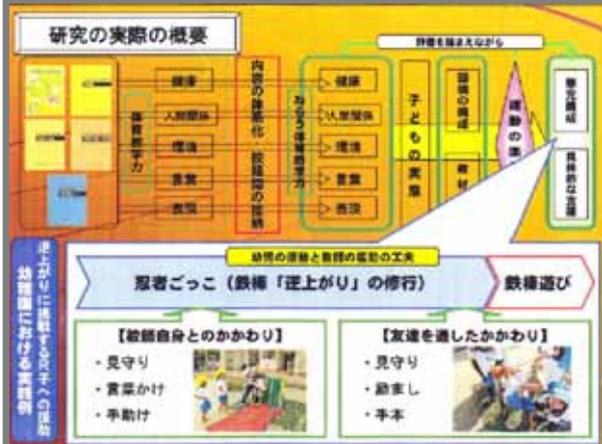
まずは、幼稚園、「年長の逆上がり挑戦するA児への援助」について報告いたします。

実践が行われたのは9月から12月の期でした。そこでその期にねらう体育的学力を、幼稚園教育要領に示される健康・人間関係・環境・言葉・表現の五領域から単に設定するのではなく、その前の期でのねらい、さらには小学校低学年での体育科のねらいとの系統や接続を踏まえ、スクリーンの様に設定していききました。

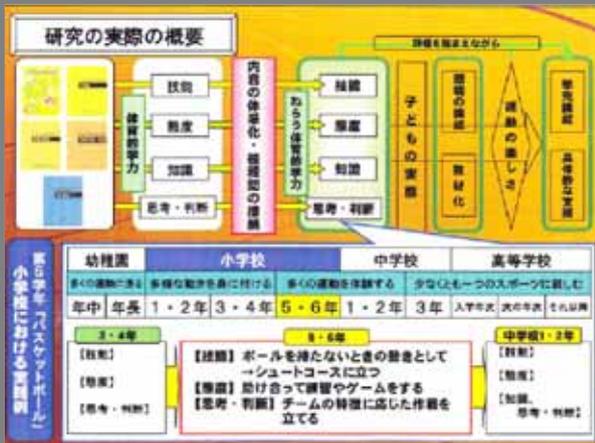


この、ねらいとする体育的学力からA児の実態を明らかにし、具体的なA児への援助の目標を設定していきました。

そして「逆上がりができるようになりたい」というA児の想いに寄り添いながら、A児がその達成感を味わうことができるようになると共に、言葉を通して友だちと励ましあったり、達成の喜びを分かち合ったりすることができるように、環境を構成していきました。

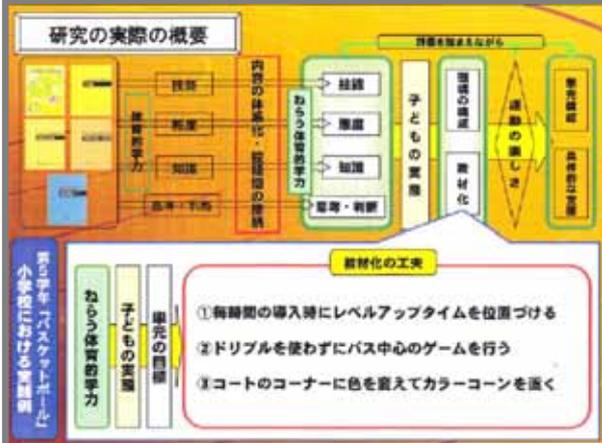


環境を構成するだけではA児の想いを叶えることは難しいので、更に、教師とのかかわりや友だちとのかかわりを意図的に位置づけ、A児の育ちを評価しながら活動と援助を繰り返していきました。



次に、小学校第5学年、バスケットボールの実践について報告いたします。

第5学年でねらいとする体育的学力を、小学校学習指導要領解説体育編の高学年だけで設定するのではなく、その前の中学年の内容はもちろん、中学校第1、2学年の保健体育科の内容との系統や接続を踏まえて設定していきました。



この、ねらいとする体育的学力から学級の実態を明らかにし、具体的な単元の目標を設定していきました。

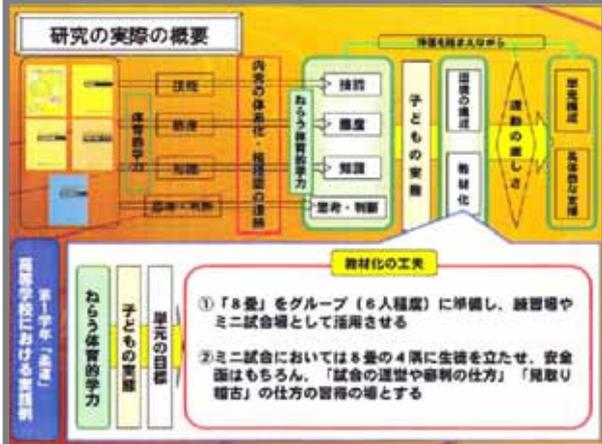
そして、学級の実態に照らしながら、スクリーンのような三点から、バスケットボールの楽しさを充分味わえるように教材化の工夫を図っていきました。





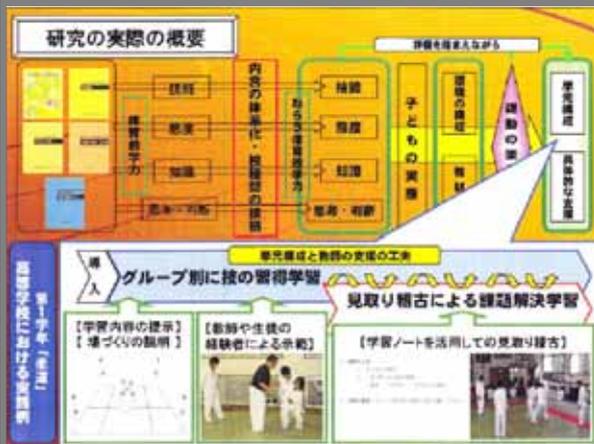
高等学校第1学年、柔道の実践について報告いたします。

これも、先ほどの中学校の実践と同様に、当該学年の隣接学年や隣接校種の学習内容を考慮して、ねらう体育的学力を設定していきました。

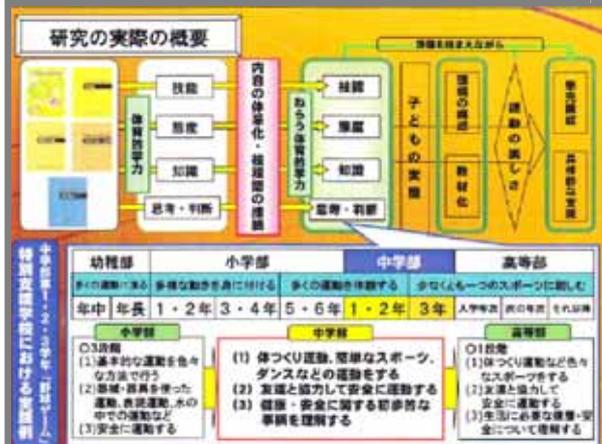


この、ねらいとする体育的学力から学級の実態を明らかにし、具体的な単元の目標を設定していきました。

そして、学級の実態に照らしながら、この二点から柔道の楽しさを十分に味わえるように教材化の工夫を図っていきました。

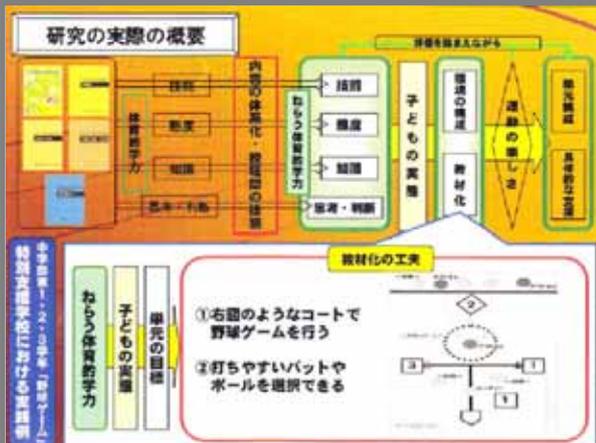


そして、柔道の楽しさを味わいながら、ねらいとする単元目標を確実に達成できるように単元を構成し、教師の支援を位置づけ、単元目標の達成状況を評価しながら支援を積み上げていきました。



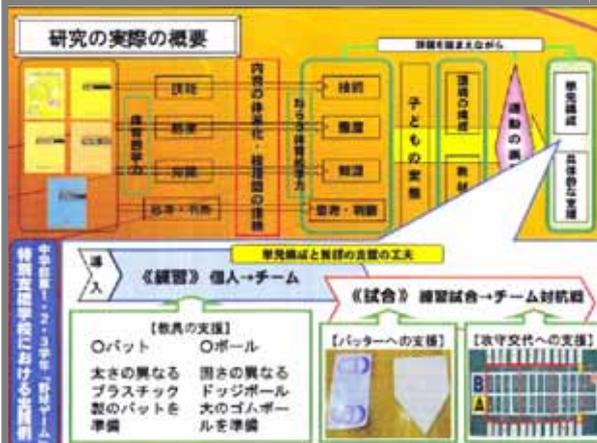
最後に、特別支援学校中学部第1、2、3学年、野球ゲームの実践について報告いたします。

中学部でねらう体育的学力を特別支援学校学習指導要領の保健体育科の内容だけで設定するのではなく、その前の小学部の体育の三段階での内容はもちろん、高等部の保健体育科の一段階での内容との系統や接続を踏まえて設定していきました。

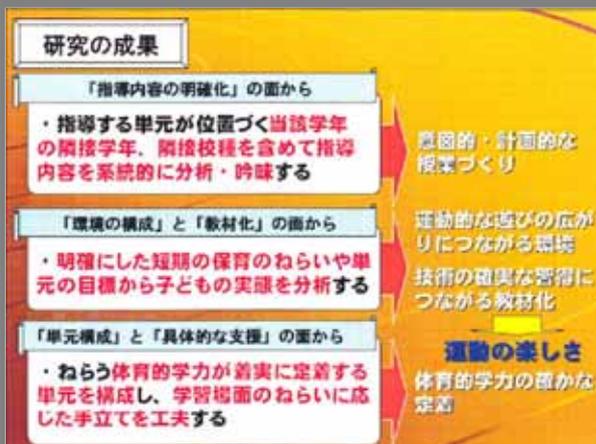


この、ねらいとする体育的学力から学級の実態を明らかにし、具体的な単元目標を設定していきました。

そして、学級の実態に照らしながら、次のような二点から野球ゲームの楽しさを十分に味わえるように教材化の工夫を図っていきました。



そして、野球ゲームの楽しさを味わいながら、ねらいとする単元目標を確実に達成できるように単元を構成し、教師の支援を位置づけ、単元目標の達成状況を評価しながら支援を積み上げていきました。



これまでご覧いただいた実践を通して、次のような成果が明らかになりました。

まず、指導内容の明確化の面からです。指導する単元が位置づく、当該学年の指導内容についてだけでなく、隣接する学年はもちろん、隣接校種を含めて、指導内容を系統的に分析・吟味することで身に付けさせるべき体育的学力がはっきりとし、意図的・計画的な授業づくりの方向性をはっきりとさせることができました。

次に、環境の構成と、教材化の面からです。

明確にした短期の保育のねらいや単元の目標から子どもの実態を分析したことで、運動的な遊びの広がりにつながる環境の構成や、運動・スポーツの技術の確実な習得につながる教材化を図ることができました。このことは、子どもたちに運動的な遊びや運動・スポーツそのものもつ楽しさに出会わせる上でたいへん有効であったと考えています。

最後に、単元構成と、具体的な支援の面からです。環境や運動・スポーツとの出会いで抱いた子どもの願いを大切にすると共に、身に付けさせるべき体育的学力が着実に定着する単元を構成し、技能の定着を促す支援、態度の定着を促す支援など、学習のねらいに応じた手立てを工夫することで、体育的学力の確かな定着に迫ることができました。

以上のことから、大会主題を具体化する幼児児童生徒の発達の段階を踏まえた指導の在り方について、究明することができたのではないかと考えています。

## 今後の展望

・近隣の幼稚園、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校へ研究内容を発信し、内容の共有化と実践の追試を一層図っていく

・「指導と評価の一体化」に特化した実践研究の積み上げを一層図っていく

さらに、今後の展望をスクリーンのように考えています。

明日は、福岡市・久留米市・春日市・大野城市・古賀市、そして粕屋町の14分科会会場において、公開授業、並びに研究発表、協議を通して具体を示させていただきます。是非、最後まで参加していただけますようお願いし、基調報告を終わります。

ご清聴ありがとうございました。